

論文

口頭発表の序論部の談話構造と語彙・表現

-農学部卒業論文発表の分析から-

米田由喜代・林 洋子

大阪大学留学生センター 565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

Discourse Structure, Technical Terminology and Expressions
Used in the Introductions of Oral Presentations
for Biochemistry Graduation-Theses

Yoneda, Yukiyo , Hayashi, Hiroko

*International Student Center, Osaka University**1-1, Yamadaoka, Suita-shi, Osaka, 565-0871 Japan*

理工系分野での口頭発表指導の場で、語彙・表現を習得してもそれをどのように組み立てて談話を構成するかがわからず、口頭発表の作成、とくに序論部の作成に困難を感じている日本語学習者が数多く認められる。これは、習得した語彙・表現と、目的とする序論部等のまとまりのある談話との間に、ギャップがあるためと考えられる。そこで、このギャップを埋めて序論部等の談話のスムーズな作成を促すためには、表現の関連性や談話の進め方など談話構造上から表現・語彙類型を捉えて提示することが有効であると考えた。この観点から、実際の農学部の卒業論文発表ビデオ資料から序論部に使われている表現・語彙を談話構造の枠とともに抽出、提示することを試みた。談話構造を捉えるために、構成要素という概念を採り入れた。構成要素とは、発表者のコミュニケーション上の意図に基づいて談話を分けた単位である。学習者の口頭発表作成に資することを旨として、この構成要素により序論部の談話構造を明らかにするとともに、構成要素ごとに表現・語彙類型を提示することを試みた。実際に多く使用された語彙もあわせて報告する。

キーワード：農学系専門日本語教育 卒業論文 口頭発表 序論 構成要素 専門記述語

1. はじめに

理工系分野では、論文を書く場合より口頭発表において留学生に日本語使用を求める率が高い現状¹⁾がある。しかし、理工系・農学系論文から表現を抽出・分析した報告^{2) 3)}はあるが、口頭発表についての分析例はまだ少なく教材も十分とはいえない。これは、研究内容の外部への流出に対する教員の危惧などから、分析可能な口頭発表ビデオの入手が困難であることが一因と思われる。

これまで著者らは理工系分野での口頭発表指導を進

めるなかで、日本語学習者から「原稿作成が難しく、とくに、序論部に困難を感じる」という訴えに多く接してきた。学習者が習得した語彙・表現を、どのように組み立てて序論等の談話にまとめるかがわからないと訴えていることから、語彙・表現の習得が談話上での適切な使用や談話の構成化に結びつかない現状が認められる。すなわち、学習した語彙・表現と、目的とする序論部等のまとまりのある談話の間に、ギャップがあるのである。このギャップを埋めるためには、語彙・表現と談話を同一視野に置いた上で両者を橋渡し

する^{注1}情報、つまり、表現の関連性や談話の進め方など談話構造上から表現・語彙類型を捉えて提示することが有効であると考えられる。

そこで、この観点から、ビデオが入手できた実際の農学部卒の卒業論文発表を資料として、序論部を分析し、使われている語彙・表現を、談話構造の枠とともに提示することを試みた。

また、今後の口頭発表指導用の基礎資料として、高頻度で使用される基本語の提示も重要だと考え、あわせて抽出した。

2. 分析資料と分析方法

2.1. 分析資料

大阪府立大学農学部応用生物化学科^{注2}の平成12年度卒業論文発表のビデオから序論部分を文字化し分析資料とした^{注3}。研究内容の詳細な説明に先立ち研究の意義と概要を紹介する部分を序論部と捉え、総数43の発表から、序論部が他から明確に区別できない5件と録音不良な3件を除き、35の発表を分析対象とした。

発表は質疑を含め約7分で、序論部の長さは20～81秒で、平均41.4秒である。この発表は、口頭発表に不慣れた学部生が教員の指導を受けながら行った卒論発表で、指導教員の個性が強く反映されている可能性もあり、学会や修士論文の発表に比べて短く、口頭発表を代表するものとはいえないが、1) 実際に行われた発表であり、2) 短くても序論として最低限必要な要素は論理的に組み込まれていると考えられ、3) 卒論は他大学でも同様の長さや指導方法で行われていると思われることから、発表の1パターンとして分析対象に採り上げる意味があると考えた。

2.2. 分析方法

2.2.1 表現の分析

口頭発表の序論の表現類型を、表現の関連性や談話の進め方など談話構造から捉えるために、本分析では、Swales⁴⁾が理科系論文の序論を「文章のある箇所で書き手が何をしようとしているかというコミュニケーション上の意図」(訳は杉田⁵⁾)から見て分析・提唱したCARSモデル(Create a Research Space Model)の構成要素という概念を応用した。Swalesは序論を

上記の書き手の意図から(1) Establishing a territory、(2) Establishing a niche、(3) Occupying the nicheという3つのMoveに分け、各Moveについてその意図を実現するためのStepと呼ぶ11の構成要素をあげ、構成要素ごとに表現を分析している。ただ、Swalesの構成要素は英文の研究論文のために設定されたもので、数文からなる大きい分類枠なので、本分析では短い口頭発表の序論部(1発表3～10文で平均5.9文)の談話構造をより明確に捉えるために、分析単位を1文とし、さらに、構成要素に新たな項目を加え、次項に示す12の構成要素を設定した^{注4}。

35の発表の序論部(全208文)^{注5}を、分析例(表1, 2)のように構成要素によって253単位に分け(表中の/)、表現を抽出した。基本的に1文を1単位としたが、構成要素の移動部が接続助詞や動詞の連用中止形等で切れている場合は、節で分けた。1発表は3～12単位で、平均7.1単位である。表1の分析例の②のように1単位で2つの構成要素と判定されるものもある^{注6}。

2.2.2 構成要素

各構成要素を内容・機能から以下のように定義する。

A) 研究対象領域の提示 (以下「領域提示」と略す)

発表の開始部で研究対象の領域を大きく示すもの。
[例: 表1②、表2⑧]

B) 有用性の指摘 (以下「有用性」)

有用性を指摘するもの。 [例: 表1②]

C) 問題の指摘 (以下「問題」)

問題を指摘するもの。 [例: 表2⑧]

D) 研究対象のクローズアップ (以下「クローズアップ」)

前に提示した領域の中から一つを対象に取り上げるもの。 [例: 表1③⑤]

E) 必要な物事の指摘 (以下「必要」)

必要な物や行動を指摘するもの。 [例: 表2⑩]

F) 新しい観点の導入 (以下「新観点」)

表2⑩「植物体内というのは光合成産物が手に入り、菌の侵入が限られているので、この条件を満たすと考えられます。」の「植物体内」のように、前に提示した領域内にはなかった新しい観点を導入するもの。

G) 先行研究の成果 (以下「成果」)

先行研究の成果を述べるもの [例: 表1⑥、表2⑨]

と、「食品分野ではカゼインが代表的な除タンニン剤とされています」のような一般説もこれに含める。

H) 判断結果の提示 (以下「判断結果」)

発表者自身の判断の結果を示すもの。〔例：表 2⑩〕

I) 研究上の不備の指摘 (以下「不備」)

「しかし、そのメカニズムについては未だ明らかにされていません」のようにこれまでの研究の不備を指摘するもの。

J) 研究目的 (以下「目的」)

発表者が発表中の研究の目的として明示しているもの。〔例：表 2⑪〕

K) 研究行動 (以下「行動」)

発表者が発表中の研究で行った行動を示すもの。〔例：表 1⑦〕

L) 発表行動の説明 (以下「発表行動」)

発表を進めるための、開始の合図、OHP の依頼、略称の提示、OHP による図表の提示。〔例：表 1①④〕

表1 分析例 1

それでは始めさせていただきます。(①→発表行動の説明) / 食物繊維は健康志向の高まりとともに日々の食生活において、その積極的な摂取が勧められています。(②→研究対象領域の提示&有用性の指摘) / その食物繊維の一つに五炭糖からなるペントサンがあり、小麦粉中にも約3%含まれています。(③→研究対象のクローズアップ) / 次お願いします。(④→発表行動の説明) / ペントサンの中に特に、キシロースを主鎖とし、アラビノースを側鎖にもつアラビノキシランは、その投与により免疫力を高め、(⑤→研究対象のクローズアップ) / 最近ではガンの発生を抑制する効果をもたらすことが報告されています。(⑥→先行研究の成果) / 本研究ではペントサンであるアラビノキシランを用いて生地の物性と製パン性に及ぼす影響を検討しました。(⑦→研究行動)

表2 分析例 2

単分解性の除草剤、シマジンは土壌や水系に負荷を与えます。(⑧→領域提示&問題の指摘) / これを分解する微生物は今まで多く分離されていますが、(⑨→先行研究の成果) / よく機能させるには利用可能な有機物の投与と拮抗微生物からの保護が必要です。(⑩→必要な物事の指摘) / 植物体内というのは光合成産物が手に入り、菌の侵入が限られているので、この条件を満たすと考えられます。(⑪→新しい視点の導入&判断結果の提示) / そこで、菌植物共生系による除草剤分解を目指しました。(⑫→研究目的)

2.2.3. 語彙の解析と基本語の抽出

語彙の解析は、奈良先端科学技術大学院大学の自然言語処理学講座が開発した形態素解析システム「茶釜」^{注7}を用いて行い(形態素の分類と名称は「茶釜」に従った)各形態素別の使用頻度を求めた。集計は品詞別に4講座に分けて行い^{注2}、高頻度で各講座に共通して用いられるものを抽出した。また、①4講座の発表全てで使用された語、②動詞・名詞・サ変接続名詞においては頻度数10以上の形態素で3講座以上で使用された語、③その他の主な品詞ではデータ数が少ないため高頻度上位7位までの形態素で3講座以上の発表で使用されている語を選び、基本語として表5に掲げた。

本稿では、序論部に特徴的にみられる語彙のみを構成要素の中で記述する。

3. 構成要素から見た序論の談話構造

各構成要素の出現数、出現位置、続き方を分析した結果から、序論の談話構造を以下のように考えた。

3.1. 序論全体の構造

まず、表1の分析例①のようにL)「発表行動」で発表の開始を告げるものが多い(27発表:35発表中77.1%)。

続いて、全発表の開始部でA)「領域提示」がされる。

次に、表1③のように約半数の発表でD)「クローズアップ」が現われる(16発表:45.7%)。出現位置は序論部前半~半ばが多く、序論部全体を10単位として平均出現位置を算出すると、4.8番目に現れている^{注8}。

序論部後半に、表2⑩のように、F)「新観点」が多く現われる(15発表:42.9%)。発表全体を10単位とすると平均出現位置は6.8番目である^{注8}。なお、「クローズアップ」「新観点」の2つを含む発表は3発表である。

末尾では、全発表でJ)「目的」、K)「行動」、または両者によって、発表者の研究概要を紹介している。約半数の18発表(51.4%)で「そこで」を使って「目的・行動」を導入している。

この全体の構造を模式的に図1の中央に□と↓で示す。

3.2 連続する構成要素

関連性を持ち連続して現われる要素も認められた。これを表3にまとめ、図1に○と↓で付加える。

- (1) 「領域提示」→「有用性」(5発表:14.3%)
 「領域提示」→「問題」(3発表:3.6%)

5発表で「領域提示」に「有用性」が続く。これに、表1②のように「有用性」で「領域提示」をした14発表(表4のA)を加えると、半数以上の計19発表(54.3%)で開始部において有用性が指摘されていることになる。

また、開始部において問題が指摘される発表は、上記3発表に、表2⑧のように「問題」で「領域提示」をした5発表(表4のA)を加えると、計8発表になる。

- (2) 「必要」→「新観点」(4発表:11.4%)
 「必要」そこで「目的」・「行動」(7発表:20.0%)

「必要」は約1/3の発表に現れ(12発表:34.2%)、直後に「新観点」(4発表:11.4%)や「目的」・「行動」(7発表:20.0%)が続く。このことから、「必要」は話を新

たに展開する機能を持つと考えられる。

- (3) 「問題」そこで「目的」・「行動」(5発表:14.3%)
 「不備」そこで「目的」・「行動」(7発表:20.0%)

「問題」の中の3発表で、また、「不備」の中でも6発表で、「そこで」を使って妥当な解決策として自身の研究「目的」・「行動」を導いている。

- (4) 「有用性」が、「問題」(6発表:17.1%)

出現位置は不定だが、6発表で「有用性」に「問題」が、「が」「しかし」等の逆接の接続表現を伴って続く。

- (5) 「成果」が、「問題」(4発表:11.4%)
 「成果」が、「不備」(8発表:21.1%)

出現位置は不定だが、「成果」には「不備」「問題」が逆接表現で多く続き、とくに「不備」では、全発表中に現われた「不備」の88.9%が「成果」に後続する。

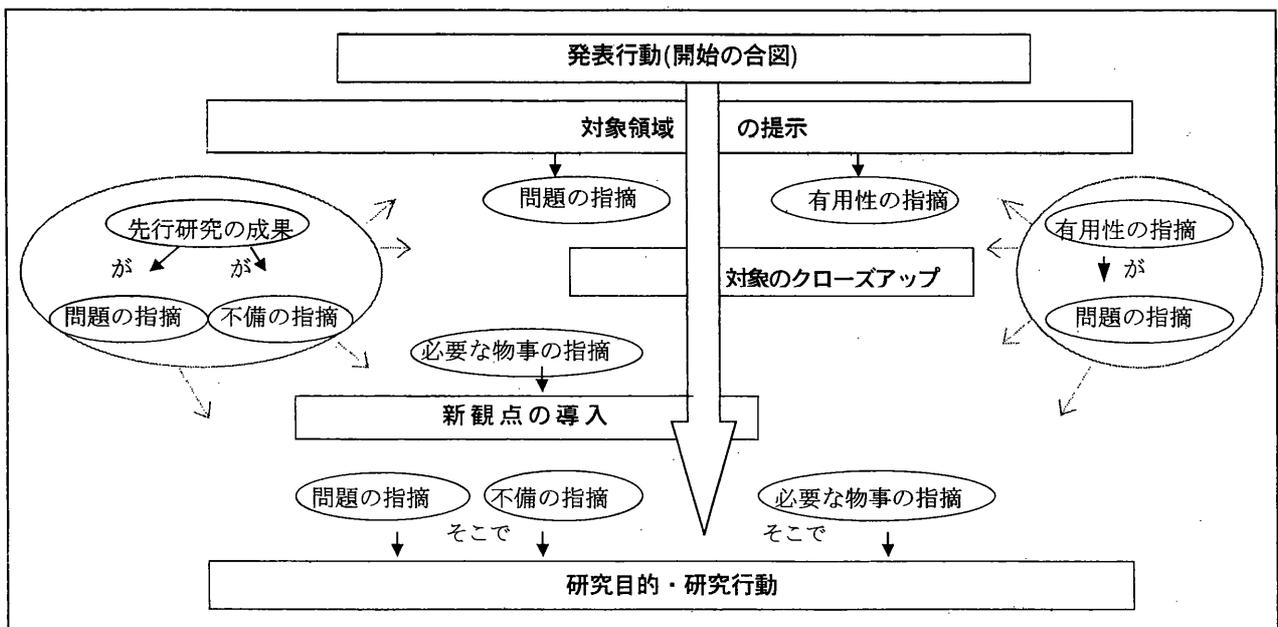


図1 構成要素から見た序論の談話構造

表3 連続する構成要素

前件	接続表現	後件	出現発表数	出現率
A 領域提示	—	B 有用性	5/35	14.3%
A 領域提示	—	C 問題	3	3.6%
B 有用性	～が、	C 問題	6	17.1%
G 成果	～が、	C 問題	4	11.4%
G 成果	～が、	I 不備	8	21.1%
E 必要	—	F 新観点	4	11.4%
E 必要	そこで	J 目的・K 行動	7	20.0%
C 問題	そこで	J 目的・K 行動	5	14.3%
I 不備	そこで	J 目的・K 行動	7	20.0%

表4 各構成要素で2度以上現われた表現

		出現発表数	出現単位数
【v】 ：動詞の辞書形・能動態 【v.受動態】 ：動詞の受動態 【N】 ：名詞 《 》 ：別の項目で表現を収載 ○○ ：漢字2字熟語 () ：多く含まれるもの ～～系 ：～～と類似表現を含んだ数			
		G) 先行研究の成果(一般説を含む) 計 26発表	47/253
		○○されています 系	7
		報告されています 系	8
		ことが明らかになっています	2
		ことがわかっています	2
		(盛んに) 研究されています 系	2
		(当研究室では)～が【v.受動態】ました	4
		(当研究室では)～を【v】ました	2
		(当研究室では)～を【v】てきました	2
		と考えられています [一般説]	8
		と知られています [一般説]	5
		とされています [一般説]	2
		とされています [一般説]	2
A) 研究対象領域の提示 計 35発表/35		35/253	
～は【v.】【N】です/であります		7	
《有用性の指摘》 (→別項参照)		14	
《問題の指摘》 (→別項参照)		5	
《必要な物事の指摘》 (→別項参照)		2	
B) 有用性の指摘 計 19発表		31	
～は(～として)(～に)利用されています 系		7	
～は【有用】であります/【有用】な【N】～ 系		6	
～は～が期待されています 系		6	
C) 問題の指摘 計 17発表		24	
～は～が問題になっています 系		4	
～は～ができません/不可能であります/難しく、～		4	
～には～問題(点)があります 系		3	
【v】と、【悪現象】を起こします 系		3	
D) 研究対象のクローズアップ 計 16発表		18	
～のうち/～の中でも特に 系		5	
【N】には～		4	
本【N】		4	
この【N】/その【N】		3	
このうち/そのうち		2	
E) 必要な物事の指摘 計 12発表		15	
～には～が必要で 系		4	
～が望まれています		3	
～なければなりません 系		3	
～は不可欠な【N】です/あります		2	
F) 新しい観点の導入 計 15発表		17	
《研究成果》 (→別項参照)		6	
《有用性》 (→別項参照)		4	
《判断結果の提示》 (→別項参照)		3	
		H) 判断結果の提示 計 10発表	11
		～と考えられます 系	8
		～と考えました	2
		I) 研究上の不備の指摘 計 9発表	9
		～はまだ明らかにされていません 系	4
		J) 研究目的 計 24発表	25
		(本研究)は～を目的としました/して《行動》	13
		(本研究)は～ために、《行動》	6
		(本研究)は～を目指しました/目指して《行動》	3
		本研究の目的は～です	2
		K) 研究行動 計 24発表	28
		(本研究では/今回)○○を行いました	7
		(本研究では)～を/について検討しました	7
		(本研究では)～を○○しました	7
		(本研究では)～を/について調べました	3
		(本研究では)～の○○を試みました	2
		L) 発表行動の説明 計 32発表	51
		始めさせていただきます [開始の合図]	22
		始めます [開始の合図]	5
		～お願いします [OHP依頼]	7
		以下～と略させていただきます [略称]	5
		以下～ [略称]	3
		この図/これは～したものです [図表提示]	3

4.各構成要素の出現数と使われた表現・語彙

各構成要素で2度以上出現した表現を表4に示す。各構成要素の出現発表数と出現単位数(以下「例」で数える)も記す。

A) 研究対象領域の提示 (35発表 35例)

14発表で特性・機能・位置・構成等が説明されている。この説明には、「名詞+です(4例出現:以下4と略す)/であります(3)」の文末が特徴的に現れ、7例の

名詞は全て「～は～を観察する方法であります」のように名詞修飾を伴う。また、「有用性」(14発表)や「問題」(5発表)によって「領域提示」をするものもある。

研究対象として新出語を説明する際に「～は」を多く使い、「～とは」と定義表現を使用しているのは2例のみである。また、「これ/こちら/この」などの「こ」系の語彙が多いのは、OHP等の視覚資料を指しながら話すという口頭発表の特徴を表している。

B) 有用性の指摘 (19 発表 31 例)

全単位中 12.3%と多く出現する。「利用されて/用いられて/使われて+います」は、7 例中 5 例で「～として」を伴っている。「有用」「重要」などのナ形容詞が、文末と名詞を修飾する形で使われている(6)

C) 問題の指摘 (17 発表 24 例)

約半数の発表で現れ、問題の性質により表現が異なる。学科特性から多く現われる人体・生体に対する問題(8)は、「有害であります」「～と障害を引き起こします」等と具体的に示される。社会的な問題発生(7)には「問題になっています」「心配されています」が、装置、材料等の実験遂行上の問題(6)は「問題点があります」「～ができません」等が使われる。

D) 研究対象のクローズアップ (16 発表 18 例)

クローズアップの手法としては、①名詞の繰返しや、「本酵素」のように名詞に「本」や「この」を付けることで、前件を直接指示するもの、②「そのうち、～中でも特に」と対象を絞っていくもの、③「～に対して」等で対照的なものに焦点をあてるものがある。

E) 必要な物事の指摘 (12 発表 15 例)

取るべき行動(7)、必要な物(4)、備えるべき特性(4)を指摘している。取るべき行動を目的と共に示す表現としては「～には～が必要です」が、必要な物には「不可欠」「需要/重要性が高まります」が、備えるべき特性には「備えて/あわせもっていなければなりません」、および「期待され/望まれています」が使われている。

F) 新しい観点の導入 (15 発表 17 例)

特定の表現はなく、「成果」(7)や「有用性」(4)「判断結果」(3)の表現が用いられるが、表 2⑩のように、文の前半で「植物体内」という新しい観点を挙げ、後半で「この条件」と前件に結びつけるものが多い。新しい観点は①前件で言及した語を含むより広い視野に移る、②別の事柄に移る場合も含むが、①の場合は「一般に」、②の場合は「また、一方」などで示されることが多い。

G) 先行研究の成果 (26 発表 47 例)

全単位中の 18.6%を占め、「発表行動」の次に多い構成要素である。「有用性」(11)、「クローズアップ」(8)、「新観点」(6)を示すのにも使われている。

研究当事者を明示したものは、「当研究室では～を見

出しました」のように、発表者の所属研究室の成果(以下自己成果と略す)に限られる。自己成果は「(動詞の能動態)+ました」、または、「(動詞の受動態)+ました」で表される。一方、他者の研究を「田中は～を分離しています」のように動詞の能動態で研究当事者とともに示す表現は見られなかった。上記の「当研究室では」と自己成果であることを明示した成果以外では、研究当事者が明示されず、「報告されている/報告がある(8)、考えられている(8)、知られている(5)、明らかになっている(2)、わかっている(2)、されている(2)、言われている(2)」などで成果が述べられている。研究行動を表す動詞は全て「(動詞の受動態)+ています」の形で、一般説も含め、全てテイル形で示されている。

H) 判断結果の提示 (10 発表 11 例)

全ての例で「～ことから/より」「～ため」等で判断の根拠が示されており、卒論発表の論理性を裏付けている。

「考えられます」(8)は様々な位置で使われるが、「考えました」(2)は研究行動の直前の構成要素のみに見られた。このことから、判断を広く示すには自発の意味を持つ「考えられます」を使い、特に発表者の研究行動の妥当性を示す場合に限って「考えました」を使うものと判断される。

I) 研究上の不備の指摘 (9 発表 9 例)

「まだ明らかにされていません」(4)、「まだ不明です(1)」など「まだ」が多く使われている。

J) 研究目的 (24 発表 25 例)

「本研究では～を目的とし～」(13)が多く、約半数である。「目的」と「行動」の双方を述べた 13 発表では全て 1 文にまとめられている。また、「目的・行動」では「本研究では」(18)を多く伴う。接頭詞の「本」の 62%は「本研究」の形で研究目的を述べる際に指示詞的に使われ、サ変接続名詞「研究」も、その 61%が「本研究」の形で研究目的を述べる際に使われている。

K) 研究行動 (24 発表 28 例)

発表者自身の具体的な研究上の行動は、能動態のタ形で表されている(27)。研究行動を示す動詞は「検討した(7)、調べた(3)、解析した(2)」などである。

L) 発表行動の説明 (32 発表 51 例)

口頭発表のみに現れる構成要素で、全単位中 20.2%

表5 農学部卒業論文口頭発表序論部分の解析結果集計より～基本語

名詞・ナイ形語幹・一般・固有名詞・数詞	数	名詞-サ変接続	数	動詞	数	接頭詞	数	名詞-形容動詞語幹	数	副詞・名詞-副詞可能	数	名詞-接尾-一般	数	
酵素	36	研究	36	する	261	本		34	明らか	10	さらに	6	性	27
活性	22	分解	20	考える	23	当		6	可能	5	まだ	3	系	20
菌	22	利用	16	なる	20	計		40	必要	5	結果	6	的	18
細胞	22	結合	14	用いる	19	品詞計		69	安定	4	最近	4	剤	12
植物	20	存在	12	ある	16	品詞計に占める割合	58.0%	計	24	多く	4	体	12	
目的	20	還元	11	行う	14			品詞計	100	場合	3	中	12	
質	15	検討	11	含む	10			品詞計に占める割合	24.0%	直接	3	化	11	
遺伝子	11	代謝	11	持つ	10			計			29	室	8	
光合成	11	解析	9	得る	9			品詞計			79	内	8	
生物	10	形成	9	できる	8	格助詞-連語	数	品詞計に占める割合	36.7%			病	8	
物質	8		149	示す	6	によって/より/よる	37					計	136	
構造	8			言う	5	として	29					品詞計	253	
微生物	7				401	において/おける	17	接続詞	数			品詞計に占める割合	53.8%	
糖尿	6					について	14	そこで	19	形容詞	数			
	218					に対して/対し/対す	11	また	11	高い	5			
						という	6	および	6	強い	4			
						と共に	3	しかし	6	多い	3			
計	218		149		401		117		42		12			
品詞計	952		601		542		123		59		35			
品詞計に占める割合	22.9%		24.8%		74.0%		95.1%		71.1%		34.3%			

と最も多く、口頭発表には必須の要素と考えられる。開始の合図「では始めさせていただきます」等(27)、OIPの依頼「～お願いします」(7)、略称の提示「以下～と略させていただきます等」(3)、図表の提示(3)があり、待遇表現を使う点が特徴的である。

5. おわりに

表現の関連性や談話の進め方など談話構造から表現・語彙類型を捉えて提示することを目指して、実際の農学部卒業論文発表の序論部から表現・語彙類型の抽出し、序論の談話構造を明らかにすることを試みた。

発表者の意図を実現するための構成要素という概念を採り入れることによって、単なる頻用表現の提示ではなく、序論の構造上どこで、どのような関連性を持たせて使うかという情報も含めて表現・語彙を提示することが可能になったと考えている。

ただ、本分析の対象は農学部の1学科の短い卒業論文発表であり、理工系専門分野の口頭発表の1パターンに過ぎない。今後は、今回得られた表現・語彙類型や序論の談話構造についての知見を、他の分野で行われる実際

の口頭発表例と比較することにより妥当性を検証し、そのうえで、日本語学習者に対して談話のスムーズな展開を支援できる教材の開発につなげたいと考えている。

また、語彙については、表5を見ると農学部応用生物化学科に特有と思われる語はそれほど多くはなく、他の分野の論文や口頭発表でも用いられている語が多い²⁾。これは広く専門について述べる時に使われる語(専門記述語)が共通していることを示すものと思われるが、詳しくは実際に行なわれた他分野の口頭発表・論文の調査と比較することにより明らかにしたい。また、紙面の都合上、本稿では序論に特有な語彙の記述に限ったが、語彙とそのコロケーション(慣習によってまとまって使われる語の連鎖)⁶⁾の検討結果は興味深く、さらなる調査によって学習者により有用な知見が得られると考えている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、卒業論文発表のビデオ記録テープを調査資料として提供してくださった大阪府立大学農学部応用生物化学科に感謝申し上げます。

注

- 注1 野村眞木夫はこの観点の重要性を『日本語のテキスト-関係・効果・様相-』ひつじ書房, (2000)で指摘している。
- 注2 応用生物化学科は農学部4学科の一つで4講座12研究室からなり、生物学と化学を基礎とし、バイオサイエンスの新知識とバイオテクノロジーの新技术を使って動植物や微生物等の生命現象を解明し、食糧等諸資源の生産・変換・利用や環境の修復・保全等も含めた教育・研究を行っている。
- 注3 文字化は著者らが卒業論文要旨集を参考に共同で行った。なお、フィルターは分析対象にしなかった。
- 注4 構成要素の設定には、山崎信寿ほか著『科学技術日本語案内 新訂版』慶応大学出版会(2002)、アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『大学・大学院留学生の日本語4 論文作成編』アルク(2002)等を参考にした。
- 注5 全文明確な文末表現で終り、明確に文と認識できる。
- 注6 本分析は、発表作成指導のための基礎資料を得ることが目的で、分析法の確立を目指したものではない。また、発表にはあったが、今回の論文でとりあげていない構成要素も存在する。
- 注7 「茶釜version2.0」の解析精度(正解率)は96%程度(語分割・品詞・読みの全てを求める場合)と公表されている。
- 注8 話の展開を明確に把握するために、展開に関与しない「発表行動の説明」を除外して計算した。

参考文献

- 1) 米田由喜代：工学系研究留学生の研究活動上の使用言語について，専門日本語教育教材作成に向けて，大阪大学工学部国際交流委員会（1999）
- 2) 村田年：論述構造を支える文型の基礎的研究—多変量解析によるジャンル判別に有効な文型の抽出—，専門日本語教育研究創刊号，pp32-39（1999）
- 3) 村岡貴子：農学系日本語学術論文の「緒言」における文型，日本語の地平線，黒潮出版，pp. 215-225（1999）
- 4) Swales, John M.: Genre Analysis English in academic and research settings, Cambridge University Press（1990）
- 5) 杉田くに子：上級日本語教育のための文章構造の分析，日本語教育95号，pp49-60（1997）
- 6) 大曾美恵子・滝沢直宏：コーパスによる日本語教育の研究，日本語学4月臨時増刊，pp. 237-240（2003）

著者紹介

米田 由喜代：大阪大学留学生センター非常勤講師，大阪大学工学部留学生相談室日本語教育担当【経歴】大阪大学大学院薬学研究科修士課程修了【専門】理工系専門日本語教育

林 洋子：大阪大学留学生センター非常勤講師，大阪大学工学部留学生相談室日本語教育担当，国際協力事業団日本語講師【経歴】東北大学法学部卒業【専門】専門日本語教育

英文要旨

While instructing learners of Japanese in the field of science on how to make oral presentations, it can be seen that many of them experience difficulties, especially in the preparation of the introduction. Their difficulties seem to derive from the gap between their vocabulary and the expressions they have learned and the discourse they need. Therefore, it was thought that it would be useful to provide instruction in the vocabulary and expressions related to discourse structure in oral presentations. The vocabulary and expressions used in the introduction were extracted from videos of biochemistry graduation thesis defenses and presented to students in conjunction with the discourse structure. To determine the discourse structure, the concept of "structural elements" based on the communicative purposes of presenters was used. Using these structural elements, the discourse structure of the oral presentation introductions is demonstrated and the vocabulary and expression patterns are explained. Vocabulary, which were often used in learners' presentations, are also reported in this paper.